

美術情報と言語

著者名(日)	中村 節子
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	21
ページ	205-213
発行年	2015-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003019/

美術情報と言語

中村節子

はじめに

美術史研究では、作家や作品、画像、史料、文献など様々な情報を扱う。長年日本・東洋美術を研究する専門機関の図書室で働いた者にとって、「多言語」対応は切実な問題だった。

その図書室には、毎年様々な国の人々が訪れる。日本語の堪能な研究者も多いが、東洋美術への関心の拡大やインターネットの普及からか、近年東欧、中東、アジアなど英語圏以外の国の学生が増えており、彼らは日本語の会話が不得手でも読解は可能で、大概英語をマスターしている。研究対象もたとえば韓国よりも日本国内に多い高麗仏画のように、日本美術とは限らない。国内の利用者の中には、海外所在の美術品について調査する人も少なくないが、作品は世界中にあり、資料は多様な言語で書かれている。

利用者の要望を把握してそれに応じたレファレンスや資料を提供することが、図書館員の責務だが、専門性の高い情報の提供や収集にはある程度の語学力が伴わなければ十分な対応は難しい。

もちろん、研究のために国内の利用者もこれまで以上の語学力が求められるだろうが、そのための「多言語教育」を語るには専門家でなくては無理なので、本稿では様々な「美術情報」と「書き言葉としての言語」の係わりをみてみようとおもう。

本の時代

図書館員として、海外の利用者には少なくとも英文表記を伴う刊行物を提供したいが、対象作品の多くが日本国内にあり読者も大多数が日本人という状況や、外国人でも研究者であれば日本語が読めるはずという認識からか、国内では刊行物の「多言語」対応に消極的だったように思える。近年は図版リストや本文に、英文を添えた美術書や展覧会カタログが増えたが、専門誌である紀要や研究報告の類ではまだ十分とはいえ、他の言語となると非常に少ない。そこで、「美術」という言葉や「美術史」という学問が誕生した明治時代から昭和前期までに日本語以外の言語で書かれた日本・東洋美術に関する本をいくつかみてみよう。

“Histoire de l'Art du Japon”

最初に紹介するのは、“Histoire de l'Art du Japon” (1900) である。これは日本で初めて「帝国博物館ニテ美術歴史ヲ編纂発行スル」事業が開始されていたところに、1900年(明治33)のパリ万国博覧会で「日本美術史」を「展示」することになり、加えて体系化した自国の美術史を示すことで日本が近代的国家であることをアピールしようとした明治政府の意図もあり編纂を急ぐことに

なったのだが、1897年（明治30）に編纂主任に任命された岡倉天心（1863-1913）が途中で辞任するなど紆余曲折があり、最後は博覧会事務官長の林忠正（1853-1906）に託され、パリで刊行された日本人の編纂による最初の「日本美術史」仏文版で、1000部印刷され279部が各国君主や美術関係者に配布されたという¹⁾。

翻訳は1894年（明治27）に日本語と古美術研究のため自費で来日し、のち仏国領事館通訳官や、御雇外国人として陸軍省砲工学校や高等商業学校附属外国語学校のフランス語教師を勤めたEmmanuel Tronquois（1855-1918）だった。彼は黒田清輝ら白馬会系の画家や知識人らと親交を深め1895年（明治28）には東京美術学校で欧州の美術教育や美術行政についての講演も行っている²⁾。

パリではTronquoisの義弟で美術評論家のFrançois Thiébaud-Sisson（1856-1936）も翻訳原稿の最終校正を手伝っているが、日本美術史を最初に体系的に論じたとされる東京美術学校での天心の講義「美学及美術史」（1890年（明治23））からそう遠くなく、専門用語自体が確立する前の翻訳作業は相当な困難を伴ったことだろう。林も序文で「翻訳者は、仕事に取り掛かる前に、語彙を創り出す必要があった云々」と感謝の言葉を記している。

1901年（明治34）には和文版『稿本日本帝国美術略史』、1913年（大正2）には『ジャパン・タイムズ』の創刊者で英語学者の武信由太郎（1863-1930）と在米ジャーナリスト河上清（1873-1949）が翻訳した英文版“A History of Japanese Arts”も刊行されている。

作品名を拾ってみると、「鳥獣戯画」“Caricatures d'Animaux”，「伴大納言物語画卷」“Ban-Dainagon”，「平治物語画卷」“Heidji-Monogatari Makimono”，「源氏物語画卷」“Ghenji-Monogatari”と和文版では「絵巻」という語彙は使用されておらず「画卷」で統一されている。仏文版では“Makimono”，英文版では“Picture Scroll”と記されている。

“L'Art Japonais” と “The Pictorial Arts of Japan”

当時のヨーロッパでは、1862年（文久2）のロンドン万国博覧会に出品されたイギリスの駐日公使Rutherford Alcock（1809-1897）の収集品に始まり、1867年（慶応3）のパリ万国博覧会での幕府と薩摩藩、佐賀藩の出品、1873年（明治6）のウィーン万国博覧会の政府出品と、日本の美術品が評判となってジャポニスムがおこっており、『国華』と引き合いに出される美術雑誌“Gazette des Beaux-Arts”（1859年創刊）主筆でコレクターでもあるLouis Gonse（1841-1926）の“L'Art Japonais”（1883）や、御雇外国人で海軍軍医学校の英国人医師William Anderson（1842-1900）の“The Pictorial Arts of Japan”（1886）など外国人の著した研究書がすでに刊行されていた。

余談だが、Gonseの著作には前述の林忠正が協力していた。林は1878年（明治11）にパリ万国博覧会通訳の仕事で起立工商会社社員として渡仏し、1905年（明治38）に帰国するまで美術商として27年間フランスで活躍した人物である。“L'Art Japonais”はのちに抜粋翻訳されて『日本美術協会報告』（1893～94）に「根氏日本美術」（翻訳者不明）として連載されている。Andersonは1873年（明治6）に来日し、滞日中に日本語を習得して日本絵画史にも精通し、1879年（明治12）

には工部大学校で "History of Japanese Art" と題する講演も行い、本人は早い段階で「日本美術」の執筆を計画していた。彼の著作は、1878年(明治11)に英国公使館付一等書記官見習として渡英した末松謙澄(1855-1920)が翻訳し、のちに『日本美術全書』(1896)として日本で出版されている。なお林は末松とパリで交友関係にあったが、在留邦人として二人は何を語り合っていたのだろうか。

以上の3冊は、現在の「日本美術史」とはかなり趣を異にしており、内容よりも日本の美術史学の成立を語る素材として必ずセットで紹介されるが、なかでも2冊の外国人の著作への助言や翻訳の際に、在留邦人として、おそらく持ったであろう外国人の「日本美術」イメージへの違和感をどのように埋めていったのだろうか。

『真美大観』

1900年(明治33)のパリ万国博覧会には、もう一つ日本の美術書のエピソードがある。『真美大観』(全20巻 1899～1908)は、京都建仁寺の塔頭に設けられた禅宗系の団体「日本仏教真美協会」が、美術を介して布教活動を進めようと企画したもののだが、内容の変更に伴いのちに新設の審美書院が引き継いで刊行した日本初の美術全集である。日本と中国の作品750点余りに和文英文の解説を付けて、法量はフィートインチに換算され、美術がまだ特権階級の中で成立していた時代ならではの企画で、精巧を極めた印刷技術の高価な豪華図録だった。その方針を通したのは販路を海外まで想定していたからだが、知名度を高めるため出品したパリ万国博覧会で金牌を、つづく1904年(明治37)のセントルイス万国博覧会(書籍名不明)でも最高賞と金賞を受賞した³⁾。

序を書いた九鬼隆一(1850-1931)や初期の作品選択を担当した今泉雄作(1850-1931)は "Histoire de l'Art du Japon" にも関わり、政府が1888年(明治21)から始めた「近畿地方古社寺宝物調査」の撮影を担当した小川一真の写真は "Histoire de l'Art du Japon", 『真美大観』, 『国華』に使われており、官民共同の企画だったのであろう。第1冊の凡例によれば和文は藤井宣正(1859-1903)、英文は高楠順次郎(1866-1945)が担当した。藤井は1900年(明治33)ロンドンの大英博物館やヴィクトリア & アルバート美術館で仏教美術を研究し、大谷光瑞が組織した大谷探検隊にも参加した経験を持ち、高楠も1890年(明治23)から英、独、仏に留学経験があり東京帝国大学教授や東京外国語学校の校長を務めた、共に仏教学者である。なお高楠は1904年(明治37)に日露戦争の広報活動として前述の末松に随行し3年間ロンドンに滞在するなど、外交面でも活躍している。高楠は、留学経験を持つ日本人として外交交渉に役立つと末松に駆り出されたのだけれど、そもそも二人をつなぐ接点は何だったのであろう。いずれにしても美術に仏教に外交と幅の広い活躍ぶりである。外交交渉の合間に高楠と末松は美術について語ることはあったのだろうか。

さて編集はのちに審美書院を牽引した田嶋志一であるが、パリでの受賞に自信を持ったのか、1910年(明治43)の日英博覧会の自営出品にも『東瀛珠光』(全6巻1907)『雪舟画集』(1909)『東洋美術大観』(全12巻1908～1910)等を出品し名誉大賞を受賞している⁴⁾。日本政府も、パリ万国博覧会に出品した "Histoire de l'Art du Japon" (『稿本日本帝国美術略史』)にあたる "Japanese temples and their treasures" (『特別保護建造物及国宝帖』)を日英博覧会に出品している。これら

官製美術史は、日本が近代国家であることをアピールする目的で編纂されている。おそらく『真美大観』を始めとする審美書院の刊行物も後述する『英文国華』にも同様の意識があっただろう。

ドイツでは博覧会以前から交流があったベルリン美術館の東洋美術部門の責任者だった Otto Kummel (1874-1952) の推薦もあり、いくつかの博物館から英文版『東瀛珠光』や『東洋美術大観』の注文が寄せられていた⁵⁾。その後刊行した『元信画集』(1903)、『光琳派画集』(1903)、『浮世絵派画集』(1906)、『円山派画集』(1907)も英文版を作成し海外に送っており、日本・東洋の美術作品の紹介は審美書院の出版物に拠るところが大きい。

作品名をみてみると、真美大観第15巻(明治40)に収録された「源氏物語画卷」の解説には“Emakimono”とローマナイズされているが、和文には「絵巻」の文字はなく「画卷」となっている。また第12巻の「北野天神縁起画卷」は“Historical Sketches of Michizane Sugawara”，第14巻の「伴大納言絵詞」は“The Story of Tomo no Dainagon”となっている。

『英文国華』

次に2種の雑誌を紹介しよう。1889(明治22)年に岡倉天心らが創刊した『国華』は、日本・東洋美術の紹介と研究を専門として現在も続く美術雑誌であるが、1905年(明治38)から1918(大正7)まで英文国華“The Kokka, An Illustrated Monthly Journal of the Fine and Applied Arts of Japan and Other Eastern Countries”(133号～337号)を刊行していた。当時、天心にかわり若干28歳の瀧精一(1873-1945)が国華主幹となり、1901年(明治34)2月の132号から担当していた。和文国華でも145号から英文国華の目次や図版リストの原稿が転用され、149号からは英文解説の掲載をはじめている。瀧は1900年(明治33)から2年間帝室博物館列品英文解説事務も委嘱されており、英文編集の意識も高かったのだろう。主幹になってただちに英文版に取り組んだと思われ、中身についても玻璃版の図版は英文国華の方が一枚多く、論文解説も和文とは全く別に欧米人に理解しやすいよう考慮したという⁶⁾。英文国華は182号(1905)から、New English Editionとして装丁が独自のものになっている。翻訳はアメリカ留学の経験を持つ東京高等商業学校の英語教授高島捨太(1864-1911)で、小川一真とは共著で出版するなど交流があった。海外の読者には美術史家 Bernard Berenson (1865-1959) やベルリン美術館の総館長を務めた Wilhelm von Bode (1845-1929) などもあり国際的に名が知られていたようである。

実は国華社も1893年(明治26)シカゴ・コロンブス万国博覧会、1900年(明治33)のパリ万国博覧会と木版技術で受賞しているが、日英博覧会には、木版画と共に宣伝のため『英文国華』100冊、『葛飾北斎日新除魔帖』(1907)20冊などを出品し、審美書院と同じく名誉大賞を受賞している⁴⁾。

作品名を見てみると、133号の「鳥獸画卷」は“Frolicking Animals Ink-Sketches on a Scroll”，182号の「玉蟲厨子」は“Tamamushi Shrine”と記されている。

英語学の世界でも、明治20年代後半から30年代にかけては「英学の黄金時代」で、多くの新聞

雑誌に英文欄が設けられた英文ジャーナリズムの時代であったといわれている。その理由の一つに1899年(明治32)から外国人居留地の廃止で、市中で外国人と出会う機会が増えるので、「国際言語」である英語を「国民」として身に着けなくてはならないとのスローガンが掲げられたらしいが、いさかか突飛な発想ではある。英語で日本を世界に伝えることは「英文報国」ということで、それを推進する人々の中には“A History of Japanese Arts”の武信や“The Kokka”の高橋の名前も挙がっていた。海外へ向けて「日本」をアピールしようとする意識は様々な分野で共有されていたようだ。

ここまで紹介した書籍のなかから気になった作品名をいくつかあげてみたが、表記の変遷が「日本美術史」の成立と関わるのかどうかは素人にはわからない。ただ「画卷」という中国語源の文字を徐々に使わなくなったことは、模範とする文化が中国から西洋へシフトしていったことの一例なのかもしれない。それはさておき、文化遺産のような古い書籍でも、作品名や用語の翻訳をなぞっていくと、これからの「美術史」と「多言語」のかかわりに役立つ情報が見つかるかもしれない。

“Bulletin of Eastern Art”

時代は下り、1940(昭和15)年から、“Bulletin of Eastern Art”という英文雑誌が1944(昭和19)年まで刊行された。これは中国侵攻で、国際的な批判を浴び日本が孤立感を深めていく中で、海外への「文化」宣伝を進めることで国際的立場を有利に導こうとした外務省の後援で誕生した組織の一つ東洋美術国際研究会が刊行したものである。同会は「世界の日本東洋美術研究を支援し、美術に関する国際協力を行い、日本文化の理解を促進するとともに日本と他国との間の友好的関係に資する」ことを目的に掲げ、会員には前述のBerensonや後にハイデルベルク大学東アジア美術研究所を設立したDietrich Seckel(1910-2007)を始めとする滞日外国人や、横山大観、近衛文麿、細川護立、白洲次郎、牧野伸顕など美術史関係者、コレクター、華族、政府高官などが名を連ねるサロンの色彩の強い団体だった。雑誌の内容は日本の埴輪、龍門石窟、アンコール・ワットと広範囲で、美術に造詣の深い外国人による講演や論考、書評、展評等多彩な内容で、会員のほかに海外の大学、図書館、博物館、研究機関や各国大使や交流団体などに幅広く配布された。他にも“Index of Japanese Painters”や“Art Guide of Nippon I:Nara, Mie and Wakayama”など数種の美術関連書籍を刊行していた。戦時下敵性語といわれた英語を使い、統制品の用紙の配給も特別扱いを受けるなどきわめて特権的な存在だが、翻訳は多くの帰国子女が担当し、空襲下の東京で戦争末期まで刊行を続けた。

絵巻物の作品名を見ると「○○絵」「○○絵詞」などとバリエーションが出来、逆に「画卷」はみあたらない。英文表記は“Scroll-Paintings”になっている。

以上紹介した書籍の背景には、少なからずその時々のおかれた立場があり、東洋をも含んだ「日本美術」が、日本のイメージアップあるいはイメージ修復の道具として繰り返し使われてきたことに気付く。「美術」自体に罪はなく取り巻く人間の問題なのだが、時代と無関係ではいらなかった歴史に後ろめたさを感じるが、一方でこんな話もある。1944年(昭和19)の「空襲時

ニ伴フ在京外國外交官及其家族ノ避難處理要綱」という名目で軽井沢に隔離された滞日外国人のために「日本美術」講座が開かれていた。東洋美術国際研究会と同じく外務省の外郭団体として設立された国際文化振興会作成のスライドを使って英語での講義がなごやかな雰囲気の中行われたという。この講座がきっかけとなったわけではないが、戦後帰国した外国人の中には日本学の専門家となった人も少なくない。矢代幸雄が「欧米における東洋美術研究の第一資料を提供した」⁷⁾と『国華』や審美書院の功績を称えているように、国の意向や時代の流れに巻き込まれつつも様々な方法や言葉で、外国（外国人）へ紹介した「日本美術」が多くの人々を魅了してきたことも事実である。

インターネットの時代

現在、美術作品はそれが生まれた土地だけでなく、世界各地に散らばっている。たとえば前述したお雇い外国人では、Tronquoisの収集品がÉcole des Beaux-Artsを始めフランス国内の数か所に、またAndersonの収集品はBritish Museumにあるように、明治のお雇い外国人の出身地を調べれば必ずと言っていいほど、地元の美術館や図書館にコレクションが収められている。また日本にも高麗仏画や牧谿の作品を始めとする多くの中国絵画がある。海外所在日本美術については1980年代より日本からの調査が盛んになり収蔵作品の目録化が進んだ。また出版社から『秘蔵日本美術大観』など豪華図録も刊行された。2000年代に入るとインターネットの普及で作品の画像や研究情報などのデジタルデータが所蔵機関のサイトで公開され世界中で共有される時代となった。たとえば最初に紹介した“Histoire de l'Art du Japon”も仏文、和文、英文いずれも画像が公開されている。さてこのような時代の「美術情報」と「多言語」の関係はどうだろう。

“Histoire de l'Art du Japon”のように自国の「文化」の発信の舞台は、いまやインターネットである。本の時代では話題に上らなかったアジアの国がいま熱心に取り組んでいる。ここでは「美術」を含む「文化財情報」の公開を例にとって日本と韓国の比較をしてみよう。

2006（平成18）年3月に静岡大学で開催された「文化・知識情報資源共有化とメタデータシンポジウム」で韓国が国家プロジェクトで「文化財情報のデジタル化とネットワーク化」を進めており、全国の約200の博物館にある48万件の文化財情報のうち、既に26万件の情報がデータベース化されているとの報告があった。参加者が一様に驚いたのはその予算額の多さだった。正確な金額を覚えていないが、文化庁の「文化関係予算の比較」を参考にすると2005年度、日本が1,016億円に対し韓国は1,274億円で、国家予算に占める割合は日本の0.12%に対し韓国は0.95%と約8倍である。韓国は1996年から戦略的に「文化」を捉えて海外へ発信する政策を進めており、その一環として、文化観光部（現在は文化体育観光部）が中心となってデジタルアーカイブ構築を重要テーマに掲げ法整備や体制作りを進めていた。このところ日本では省庁ごとに“Cool Japan”戦略を立て、たとえば経済産業省では自動車や電化製品をファッションやアニメや音楽などのコンテンツに置き換えているが、経済の活性化が目的で文化戦略としての色彩は薄い。

「文化財情報」を例にとってみると、韓国文化財庁のサイト (<http://www.cha.go.kr>) では、韓国語、

英語、中国語、日本語の4か国語対応で、関係機関のサイトへリンクをはり、様々な「文化財」情報を公開している。日本では同様の計画が文化庁の主導で1996(平成8)年から、国公私博物館・美術館の収蔵作品や国指定文化財を対象に「文化財情報システム・美術情報システム」構築に着手して、2003(平成16)年には総務省と連携した有形・無形の文化遺産情報も含めた「文化遺産オンライン構想」へと引き継がれ、試験運用を経て2007(平成20)年に「文化遺産オンライン」(<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>)として公開された。同じ年に開始された両国のサイトを比較すると、登録件数(2013年度末で113,570件)、公開画像件数(2012年度末で全体の40%未満)、言語対応(現行は日本語のみ)等いずれも日本のサイトは遅れをとっている。日本には国指定文化財等データベース(http://www.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp)、e国宝(<http://www.emuseum.jp/>)等、似たようなサイトが複数あるにもかかわらず、なかなか満足した結果を得られない。

2011年(平成23)から、国立国会図書館では国際文化会館との共催で「日本専門家ワークショップ」というプログラムを実施し、海外の若手日本研究者に対する支援を行ってきた。2012年(平成24)は人文科学がテーマでインターネット環境下での「日本芸術の研究手法と情報探索法」の講座を同僚と共に担当した。受講資格は、海外で日本情報を入手・提供・発信する立場にいる学生や研究者、司書、学芸員などが該当し、なおかつ日本語による議論が可能な語学力を有する者である。講義、配布資料、質疑応答すべてが日本語であった。10日間ほどの日程で行われ、受講者は10名、美術史関係では日本に留学経験のあるラトビア大学の若い教官だった。彼女は室町水墨画の研究者だが、国内に日本美術どころか日本文化の本がほとんどないと訴えた。講義でも配布資料でも日本の様々なサイトを紹介したがインデックスのレベルでは求める情報の入り口でしかなく、はたして日本語前提の支援でよいのだろうかと考え込む経験だった。

2012年から2013年にかけて英国のオックスフォード大学アシュモレアン美術館で特別展「Threads of Silk and Gold: Ornamental Textiles from Meiji Japan(絹の糸・金の糸: 明治日本の装飾テキスタイル美術)」が開催され、ヨーロッパがジャポニズムにわいた明治時代に日本から工芸品として輸出された刺繍屏風を中心とした作品が展示された。日本語版のプレス・リリースも作られ、この種の収蔵品が多い京都清水三年坂美術館の協力で開かれた。このような企画はおそらく初めてで評判を呼び、当地で日本刺繍を習っている英国人からは、日本のどこへ行けばこのような作品を見られるかという質問が寄せられ、企画に携わった在英の日本人研究者は答えに窮したという。インターネットを介しても得られる情報は少ない。

これから

2013年に発行された英国・アイルランド美術図書館協会の機関誌“Art Libraries Journal” Vol.38-2で、「日本のアートドキュメンテーション」特集が組まれた。これも筆者が関わったが、日本の大学、美術館、研究所、文化遺産オンライン、国会図書館など主だった美術情報を扱う機関

のデジタルアーカイブの状況などの紹介に、東日本大震災を例にとった地域文化の救出と継承についてのコラムを加えた構成である。インターネットで個別に機関にアクセスすることは可能だが、日本のアトライブラリーの全体像を海外に向けて初めて紹介したもので、アジア地域では日本特集が最初の企画という。紹介された機関のサイトやリンクが少しでも役に立てばと願っている。

インターネットの普及で飛躍的に情報を入手しやすくなったのは事実だが、国内でも作品のデータや画像の公開が少ないなど問題は山積している。海外の図書館で働く知人の元には、浮世絵コレクターから、所蔵する役者絵の演目や役者の名前を描かれている「家紋」を手掛かりに調べてほしいとか、上演が絶えた演目のあらすじを知りたいなどの質問が寄せられるそうだが、参考書がないかあるとしても日本語のため要望に応えられないもどかしさを訴えられたことがある。

「言語」は何かを相手に伝えて、コミュニケーションを図るツールなので、第一に意味が明確でなくてはならないと思う。明治期の刊行物では作品名の翻訳に試行錯誤がみられたが、現在日本語表記も英語表記もある程度統一されているように感じる。ただ美術史を語ろうとすると、いろいろな難問に突き当たる。たとえば「東洋」と「アジア」、「古代」「中世」「近世」「近代」の区分、「日本画」と「西洋画」、「日本美術」と「東洋美術」、「絵伝」、「絵巻」、「絵詞」、「縁起絵」の違いはなにか。等々明確に説明できない筆者のレベルで話を進めてはいけませんが、美術史での「多言語教育」の土台は出来ているのだろうか。

文部科学省は平成 25 年 12 月 13 日に、2014 年度から小中高生を対象に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を推進すると発表し、その手段としてについて文末に独立項目として「日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実について」と題して、東京でオリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年までに、我が国の歴史 [近現代史の充実]、伝統文化 [そろばん、和装、和楽器、美術文化等の充実、武道の必修化]、国語に関する教育をすすめている。「オリンピックを目標に日本人のアイデンティティ云々」というのは、なにやら万国博覧会にあわせて近代日本をアピールしようとした明治時代の日本を思い出してしまうのだが、ともかく 6 年後に期待しよう。

おわりに

今や「美術」はモノも、研究も、国の枠でくくれない、やはり言葉でいえば、「グローバル」な状況にあり、「日本美術史」という枠組みすら再構築しなくてはならないのかもしれないが、その前にとりあえず、デジタルであれ、アナログであれ、美術史研究の進歩を加味した「多言語美術辞典」の編纂が待たれる。そのためには微妙な差異を持つ多様な日本語表現を踏まえた上で、流通している様々な美術用語の検証と再構築が望ましい。まずは日本語から始めるのが「日本・東洋美術における多言語教育の基盤整備」の第一歩なのかもしれない。そしてその延長線上に新しい「日本」や「アジア」の「美術史」が誕生することを期待して終わりとしよう。

注

- 1) 『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告__上』農商務省 (1902.3)
- 2) 「エマニュエル・トロンコワと明治中期の洋画壇」クリストフ・マルケ 美術研究 386 (2005.6)
- 3) 『千九百年巴里万国博覧会出品聯合協会報告』巴里万国博覧会出品連合協会残務取扱所 (1903.3), 『官報』第 5638 号 (1903.4.24), 『官報』第 6422 号 (1904.11.25)
- 4) 『日英博覧会事務局事務報告__上』農商務省 (1912.3), 『日英博覧会受賞人名録』農商務省日英博覧会事務局 (1910.9)
- 5) 『美術之日本』2-1 (1910.1)
- 6) 「瀧博士の追憶 (上)」藤懸静也 『国華』651 (1946.6)
- 7) 「国華の世界的存在」矢代幸雄 『国華』600 (1940.11)